



My姉

わかつきひかる

illustration ©みやま零

美少女文庫

FRANCE & SHION



## フローク 義姉はほわほわ天然系

久保亮太が玄関ドアを開けたとき、絹を引き裂く女性の悲鳴が耳朶を打った。  
「きゃー、きゃああああああつ」

——なんだ？

帰宅を女の悲鳴で迎えられるという体験は、そうそうできるものではない。

まるで今、レンタルショップから借りてきたホラーDVDを先取りしたかのような状況に、思考回路と体が同時に凍りつく。

「お母さーんっ、亮太くーんっ、なんとかしてっ」

「義姉さんっ!？」

名前を呼ばれ、固まっていた体が一瞬で解凍した。

亮太はレンタルビデオの袋を玄関先の靴箱の上に置くと、廊下を急ぎ、リビングの

ドアを開けた。

顔を白い煙で叩かれる。

「うぷっ」

キッチンはどうもうと立ちこめる白いもので充満し、まるで視界が利かない。

「な、なんだっ？ あ、これ、湯気だっ」

「亮太くーんっ。うえええーんっ、ど、どうしょおおっ」

流し台の前に立っているパジャマ姿の女性が逆さになった鍋なべを持ったままで振りかえった。泣きそうな顔をしている。もうもうと立ちこめていた湯気はだいぶ引いてきて、視界はクリアになっている。

祝日とはいえ、昼近い時間にパジャマにエプロンというだらしない格好で、キッチンに立つこの女性は久保清花くぼさやか。亮太の姉だ。

実の姉ではない。両親の再婚によって一カ月前にできたばかりの義理の姉だ。

職場の近くでひとり暮らしをしている。いつもは連休の前に家に戻ってきて、日曜の晩に戻ってしまう。今回は珍しく平日に帰宅してきて、もう三日目になっている。

「ど、どうしたんだよ？ 義姉さん」

亮太は清花の横に立ち、おそろのおそろ流し台を覗きこんだ。

「うわ……すげえ」

三角コーナーの上にザルが不安定な姿勢で直立していた。まだ白い湯氣を立てているスパゲッティが、ザルと流し台と三角コーナーのなかでとぐろを巻いている。

茹であがったスパゲッティをザルにあげようとして鍋をひっくりかえしたところ、勢いがよすぎてザルが動き、中身が散乱してしまっただけだった。

しかもそのスパゲッティは、麺がでろんでろんに伸びている。茹ですぎているとひと目でわかった。

転居して一カ月のぴかぴかのキッチンだが、流し台で劇的にからみ合いながらねくっているスパゲッティは、すばらしくマズそうだ。

「これじゃ食べられないな……」

「もう、君のせいなんだからねッ！」

姉は、鍋を調理台にドンと置くと、腕組みをしてツンと顎をあげた。寝乱れたポニーテールがパジャマの背中ではびこんと跳ねる。

清花はパジャマの上に、クマやウサギのアップリケが躍る、かわいらしいエプロンをつけている。仕事用のエプロンを使っているらしい。

甘い匂いがぷんと香った。清花の体臭とフローラルシャンプーの混ざり合ったほんわかとやさしい匂い。起き抜けで体臭が濃くなっているのだらう。スパゲッティの匂いよりも鮮明に香ってくる。

妙齡の女性の肌の香りは、学校でも、父親と二人で暮らしていたときにもなかった匂いで、気づかれないように深呼吸をしてしまう。

「どうして僕のせいなんだよ」

「私が助けてって言ったとき、すぐに来てくれなかったからよ!! 私の朝ご飯がダメになったのは君が悪いんだからねっ」

——ムチャクチャだよ。僕、今、帰ってきたところなんだよっ。だいたい義姉さん、今何時だと思ってるんだよ。十一時半だよ。料理するなら、せめて着替えてからにしろよ。

とは、思っけていても口に出さない。

「もうっ、もうっ、お腹減っちゃうよぉっ。亮太くぅーんっ、なんとかしてよぉっ」

姉の勝手な理屈に脱力してため息をつく亮太の横で、清花は唇を尖らせている。

腕組みをしているせいで、腕の上に乳房が乗っていて、パジャマにエプロンの胸もとがこれ見よがしに盛りあがっている。高校一年の亮太は目のやり場に困ってしまう。

「義姉さん、今、起きたの?」

「だって、お腹がぐうぐう鳴って、うるさくて、起きてしまったんだもんっ!」

「もっと寝るつもりだったのかよ?」



義弟のツッコミは華麗にスルーして、清花は文句を言いつづけている。

「亮太くんはいないしっ。お母さんは二度目の新婚旅行に行っちゃったしっ!! だいたい私に料理ができると思ってるのっ!」

「義姉さん。そこ、いばるところじゃないから」

一緒に住んでいる時間が短いので気づかなかったのだが、清花は料理が苦手だ。苦手というより、壊滅的に料理のセンスがない。父子家庭で、家事をいやおうなくやってきた亮太のほうがよほど料理がうまい。

そんな彼女は（にわかには信じられないことながら）れっきとした社会人だ。今年の春に短大の幼児教育科を卒業し、保育園に就職した。驚くべきことに地方公務員なのである。

二十歳、社会人、公務員、保母さんは、亮太の周囲にはいない人種で、父から再婚の話を聞いたときは、どういう態度を取ればいいのかわからなかった。

しかも清花は、華やかな容姿とやさしそうな雰囲気を持つ女性で、ややふっくらしているものの、プロポーションもよかった。

義母だけでなく義姉もできる。しかも美人!

緊張しまくったが、引っ越してみると、なんということもなかった。

清花は職場の近くでひとり暮らしをしていて、家に戻ってくるのはたまで、あまり

顔を合わさなかったのである。

しかも、彼女には社会人の落ち着きはまるでなかった。音楽の趣味もテレビの好みも十六歳の亮太とほとんど変わらない。

すぐにおろおろして泣きそうな顔をするくせに、こういうときだけお姉さんぶって、えらぶってくる。

「あれ？　なんだこの音？」

ぶわーんという電子音に気づいた。

音のするほうを見ると、電子レンジが動いていた。銀色のレトルトパックがレンジの庫内でぐるぐると回転している。

——こ、これは……。

レトルトパックのスパゲッティソースだ。

清花は、スパゲッティを鍋で茹でつつ、ソースをレンジであたためようとしたらしい。それはわかる。わかるのだが。

レトルトパックのこの異常なふくらみようは……。

そして、パックが内側からぶよぶよと不気味にうごめいているのは……。  
チン、と涼やかな音がした。

「できたみたい」